

鳳輦上野原行在所を發す

六月十八日。午前七時、上野原驛 行在所御發輦。是朝、群壑雲を起し密陰雨を滴す。御板輿に召させて御出門。鹵簿昨日に同し。御先導藤村縣令、前驅の警部二名、警衛の警部五名、巡查百餘人を指揮して警衛し奉る。警衛警備の配置は前紀 其條に記す、以下同之西すること十町餘にして鶴川あり。新道を開き、長五十六間の橋を架す。橋を渡り鶴川驛にて 宸憩あらせられ鶴坂を登る。路甚だ險ならず。同八時三十分、野田尻驛^{甲東}御小休所^{富田藤兵衛宅}に駐蹕。夫より十王坂を越ゆ、路稍や峻急にして山側を横過す。舊道に座頭轉 矢壺坂の險あり。御巡幸に際し新路を聞き通輦に易からしむ。同九時四十分、犬目驛御小休所^{上條盛富宅}に駐蹕。三夜坂を越え、同十一時三十分、鳥澤驛御晝 行在所井上清武宅に着御。御晝餐を召され直に御發輦。桂川に沿ふて西す。時に陰雲日を漏らし、峯巒姿を生じ水聲愈清し。宮谷坂を越え猿橋を通御。猿橋驛御召換所^{猿橋警察署}に駐蹕。時に午後一時、暫時奇勝を御覽遊ばさる。

〔美とものかす〕

犬目驛にきたるころ、雨深う霧あひて、四方のけしき見るべくもあらず、されど霧のひまより、山松の青う見えきたる、いとをかし、驛の御小休所は、上條盛富が家なり、こよをはなれて三夜坂をくたりゆく、いとけはしき山みちにて十七町あまりもやあらん、かよれば例の車よりおりてありくに、鶯のこゑとこゝろに聞えて、ことにおもしろし。

鶯のなくなるこゑに送られてのがにこゆるかひの山みち。このほかのぼりおりの坂いくところともなかれと、山梨縣のしりたる所は、何方も道つくりしてより、あまたの年を経たれば、いさゝかの雨にはそこなはれずして、車をやるにひさなやむほどのところは、をさ／＼なかりけり。橋などもいとようして、路の塵ひちをさへかきはらひたるは、あかつがさの心しられ、おもひやられていとめでたし、中この驛鳥より二十八町餘りにして、猿はしにいたる。長十七間幅二間の板橋なり、桂川の川岸あひむかひて、削りたてたる如き巖の上にわたせり、橋上より水際まで十二三間、水際より水底まで、また十二三間あり、といへり、まことに其淵の水、青みわたりて藍のごとく、橋のうへより見おろせば、めぐるめきて危ふげなることいふはかりなし。さて橋のつめに立つと、つく／＼みわたせば、向ひのきしのなからばかりより生出たる木とも、あまそよりたちて、いとくらくしけりたる中より、一筋の瀧つ瀬、ひゞきさやにとどろきおつるか、これも五六丈もやあらん、いはほをつたひてほとばしるに、其もとにすなとりする舟ひとつ横たはれる、筆にも詞にもおよぶべきにあらねど。略下

〔東京日々新聞〕 御巡幸の記

六月十八日、本日午前七時上野原の行在所を御發輦あらせられしが、坂道を登りては下り、下りては登るが上に、昨夜の雨にて路はぬかりたり、難儀云ふべからず。聖上には御板輿に召させらる。鶴川村の鶴川橋を渡らせ給ひて、御小休あり、夫より山間の道を過ぎさせ給ひて、野田尻驛にて御小休あり、十王坂、天秤坂、杯を越させらる、この御道筋には舊道といふ標札所々に在りて、今 鳳輦通御の新道は平坦砥の如く、供奉の方々も其修繕の行届きたるを賞せられたり。犬目村にて御小休あり、夫より山谷坂といふを越えて、宮濱村にて御中食をたてまつる。程なく御立ありて、午後一時廿分猿橋の警察署に御小休ありて、暫らく此猿橋の結構と四方の景色を見そなはせらる。爰より御馬車に召換へさせらるゝ、折から雨も降りやみたり。

犬目驛より山谷坂を下りて新道を鳥澤に出づ 此間一里十七町餘ありと、此邊にも拜觀人は道の兩側に坐し兩手を合せ

て拜むもあり、中には珠數をつまぐり居る齋娘も見えたり。

主上には猿橋警察署に於て御板輿より下りさせ給ひ、親しく同所の景色を見供はせられ、猶ほ寫眞に撮らせ給ひしよし。

夫より御馬車に御召換になり。略下

此所にて御馬車に召換させ給ふ。時に雨霽れて四面の翠巒景色畫くが如し。野廣く路稍坦なれば輪蹄の音高く進ませられ、殿上 駒橋二村を過ぐ。沿道の村戸皆な神酒鏡糕、若しくは蒸飯を供して駕を拜す。朴茂の風あり。午後二時十三分、大橋驛御召換所溝口五左衛門宅に駐蹕。此にて再び御板輿に召換させ給ふ。桂川の東岸に下り大月橋を渡り、同二時五十分、花咲驛御小休所星野寛則宅に駐蹕。御馬車に召換させらる。同驛の西端に井上武右衛門、路右に假屋長五を造り、少婦二十餘人をして、甲斐絹機織の状況を 叡覽に供す。

〔美とものかや〕

行々て花咲に來たり。此あたり村々里々より、人おほく出來て、れいの學校の弟子ども、御迎の旗たてたるところおほかれど、くだくだしければことぞきてしるさず。花咲學校の前に繻屋をまうけて、十二三歳より、はたちばかりのむすめども、二十人ばかり、甲斐絹を織居たり。この邊すべて養蠶をむねとして、一村の家數はづかなる所も、これせざるはなく、家毎に繻おほく積あげて見る目もいとたのもし、やうやう初狩村に入る。

又、犬目あたりより、このあたり、すべて家ごとによくかきはらひ、机とう出て、其上によき絹、あるは酒樽カかもやうのもの打しき、その上に瓶子のみきすゑ、もちひのかぐみ、また赤飯などを盛てそなへおけるは、行幸をいはひたるなり。